



# 郵便ポストの 旅

---

旅と家族の物語

---

saolipooh

---

## 郵便ポストの旅

---

ある町の道路沿いに立っている、赤い郵便ポストは、ある日、手紙たちの話を聞いて、深い悲しみに襲われ、暗い気持ちに沈んでしまいました。

「僕はね、これから神奈川に行くんだ！」

元気で小ぶりな手紙が言いました。

「オレなんて、北海道だぜ。」

「あら、ワタクシは、これからおフランスへ行きますのよ。」

手紙たちは、いつもポストのお腹のなかで、こんな自慢話をしています。

「フランスだって！」

郵便ポストは、驚きました。

「僕なんて、海外はおろか、この町からだって、一步も出たことがないよ。」

郵便ポストは、切なくなってしまいました。

「毎日毎日、たくさんの手紙たちが僕のお腹に入って、遠くの町へ運ばれていく。それなのに僕は、ここから一步も動いたことがない。なんて空虚でつまらない人生なんだ！」

そんな悲しみを何日も抱え、悩んだ郵便ポストは、ある日、ついに、故郷のこの町を出ていくことに決めました。

その晩、一本しかない足を大きく踏み出して、郵便ポストは一步ずつ確実に歩き出しました。ひどく時間がかかりましたが、朝方には、ついに郵便ポストは、故郷の町を出ることに成功しました。すると、お腹のなかの手紙たちは、大騒ぎしだしました。

「わーん、ポストが動いてしまったよー。」

「これじゃ、郵便局に行けないじゃないか！」

「せっかくフランスに行くはずだったのに、もうどこへも行けなくなってしまったわ……。」

郵便ポストは、騒ぐ手紙たちに言いました。

「大丈夫、君たちのことは責任を持って、僕が運んでいくからさ！」

郵便ポストは、得意げです。

「そんなこと、できるわけじゃない。」

「ポストは、郵便配達なんてしないぞ。」

手紙たちは、みんな口々に不平を漏らしました。しかし、郵便ポストは、今までの場所から動けたことで、すっかり興奮してしまい、何を言われても、へいちゃらでした。ひとまず故郷の隣町の家へ、手紙を届けに歩き出すことにしました。

一步ずつ、確実に。疲れましたが、この旅はとても刺激的で、郵便ポストは、休みたいとはちっとも思いませんでした。夜遅く、目的地に着いた郵便ポストは、ちゃんと手紙を玄関の郵便受けに入れました。星がまたたき、月がにんまりと齒を見せて笑う、素敵な晩でした。目的の家は、暗いなかでも赤い屋根がくっきりと光って見える、こじんまりとした素敵なおうちで、どこからか金木犀の良い匂いが漂ってきます。

「旅っていいなあ！知らないところへ行って、見たことのないものを見て、人に喜ばれる。郵便配達の仕事って、すばらしいや。」

それから、ツボにはまってしまった郵便ポストは、郵便配達の仕事を一生懸命、じっくりと時間をかけて励みました。船に乗って、フランスまでも手紙を届けることもしました。そうして、お腹のなかの手紙は、とうとう一通きりになりました。

「いよいよ、最後の配達かあ。」

郵便ポストは、淋しくなっていました。郵便配達の、この仕事を大好きになっていたのに、やめたくなかったのです。

「でも、僕は最後まで、仕事を完璧に仕上げるんだ。」

郵便ポストには、プロ意識が芽生えていました。

「さて、君のあて先はどこ？」

郵便ポストが、最後の手紙に聞くと、手紙は、おずおずとして、顔を真っ赤に染めて黙ってしまいました。

「さあ、君のあて先を言いなよ。じゃないと、ちゃんと届けられないじゃないか！」

ちよっぴりイライラして、郵便ポストはそう言いました。

「私、あて先が書いていないんです。」

やっと、最後の手紙が返事をしました。

「なんだって！」

郵便ポストは、慌てふためきました。

「あて先が書いてないんじゃ、差出人に返すしかないなあ。」

「私、差出人の住所も書いていないんです。ご主人様がうっかりもので、中身だけいれて、ポストに入れてしまったんですわ。」

最後の手紙は、申し訳なさそうに、沈んだ声で告白しました。

「なんだって！」

郵便ポストは驚き、呆れ、大きな声を出してしまいました。

「それじゃ、君は、どこにも行けないじゃないか！」

その声を聞いて、かわいそうに、最後の手紙は、ワッと泣き出してしまいました。

「そうなんですわ。私なんて、行くところも帰るところもない、家なき子なんです。どこにも行けない手紙なんて、なんの価値もありませんわ。私は、なんて役立たずな手紙なんでしょう！」  
取り乱して泣く最後の手紙を見て、優しい郵便ポストは、すっかりかわいそうになってしまいました。

「手紙さん、手紙さん、そんなに泣かないでくれよ。君のあて先が書いていないのは、君のご主人が悪かったんで、君のせいじゃないんだからさ。」

「いえいえ、私がふがいないからいけないんですわ。私のご主人様のことを、悪く言わないでください。」

郵便ポストが慰めようとする、最後の手紙は、余計に泣いてしまいました。

「ああ、ごめんね、そんなつもりじゃなかったんだよ。困ったなあ。」

最後の手紙は、まだぐすぐすと泣いています。郵便ポストは、なんとか手紙を慰めようと、あれこれ悩みました。しかし、ちっともいい考えが思いつきません。そこで、とりあえず、自分が元

いた場所へ戻ることになりました。

ずいぶんと遠くへ行ってしまったものですから、戻るのにも、ずいぶんと時間がかかってしまいました。最後の手紙は、行くあてもないものですから、文句も言わず、しおらしく郵便ポストについていきました。

ようやく郵便ポストが元いた場所へたどり着いたとき、驚くことができました。なんと、自分のいたところに、新品の郵便ポストが立っていたのです。

郵便ポストは、新しいポストに話しかけました。

「やあ。」

「やあ！君もポストなんだね。」

新しいポストは、目を丸くしました。

「他のポストに会ったのなんて、僕、初めてだよ。」

新しいポストは、美しく赤く光る体を揺らして、ウキウキと楽しそうに言いました。しかし、旅をしてきた郵便ポストは、悲しい気持ちに襲われて、暗い声しか出せませんでした。

「そうなんだ……。」

「君は歩けるんだね？すごいなー。」

「別にすごくないよ。ねえ、君、最近、ここに来たの？」

「そうだよ。前のポストが突然いなくなって、町の人たちがずいぶん困ったらしくって、急ぎよ、僕が新しくここに立てられたんだ。」

「そうだったんだ……。」

「でも、もう大丈夫。僕は、ちゃんとここに立って、手紙を守るつもりだよ。」

「そうか……がんばってね。」

「ありがとう！君もね。」

旅をしてきた郵便ポストは、すっかり悲しくなって、新しいポストの元を足早に去りました。新しいポストが見えなくなると、郵便ポストは耐え切れなくなって、大きな声を上げて泣き出しました。

「僕も、家なき子になってしまった。あて先のない手紙しか持っていない僕は、なんて無能で役立たずなんだ！旅に出ようだなんて、考えなければよかった。」

郵便ポストは、泣きじゃくりました。すると、最後の手紙が優しく話しかけました。

「あなたも、私と同じ境遇なんですね。でも、そんなに悲しまないでください。あなたは、何百枚という手紙をご自分で配達された、立派なポストなんですから。こんなことできるポストは、他にありませんわ。」

「でも、そのおかげで、家も職も失ってしまった……。」

「私がおりますわ。家なき子同士、どこかでひっそりと暮らしましょうよ。」

「手紙さん……。」

最後の手紙は、優しく微笑みました。その笑顔を見ると、郵便ポストは、大変、心が慰められました。そして、郵便ポストの安心した様子を見ると、最後の手紙もまた、大いに心が慰められるのでした。

そうして二人は、今もどこかで暮らしています。たまに、他のポストと間違えられて、手紙を

入れられたときには、郵便ポストは自分で配達をします。でも、最後の手紙だけは、いつも郵便ポストと一緒に。二人は、本物の家族になっていました。

みなさんは、もちろん、知っていますよね。世界中のどこだって、家族のいるところが、その人の家なんです。